

鉢形城歴史館平成二五年春季企画展

プレ北条氏邦シリーズ 第一回

鉢形城主

上杉顯定

あき

さだ

（東日本の副将軍 関東管領上杉氏と鉢形城）

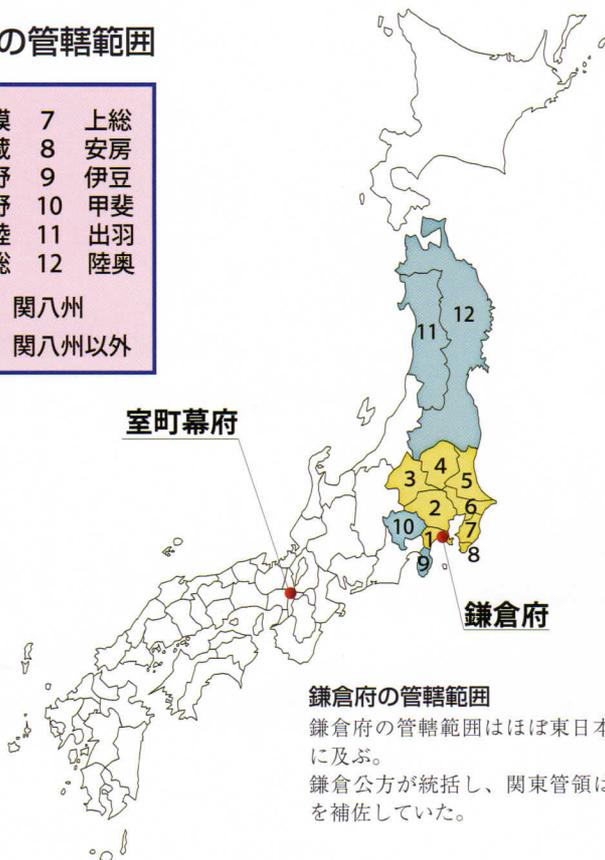
3/16<sup>土</sup>  
5/6<sup>月</sup>



## 鎌倉府の管轄範囲

1	相模	7	上総
2	武蔵	8	安房
3	上野	9	伊豆
4	下野	10	甲斐
5	常陸	11	出羽
6	下総	12	陸奥

関八州  
 関八州以外



### 鎌倉府の管轄範囲

鎌倉府の管轄範囲はほぼ東日本全体に及ぶ。鎌倉公方が統括し、関東管領は公方を補佐していた。

## 鉢形城主の変遷

史料に名を残す最初の武将は「長尾景春」。

一四七六年、長尾景春は、自らの主家、関東管領が室町幕府に対立する古河公方と利根川を挟んで対峙している最中、鉢形城を本拠として、主家に反旗を翻します。

小田原北条氏の代表的な支城として名高い鉢形城は、一四七六年から一五九〇年まで、まさに戦国時代の幕開けから幕切れまでの一一四年間、歴史上にその名を残しています。

しかし、鉢形城は当初から北条氏の城だったわけはありません。

関東の戦国時代の幕開けともいわれる長尾景春の乱に始まり、移ろいゆく時代の潮流の中、やがて豊臣秀吉の天下統一という波に飲み込まれるまで、鉢形城は幾度か城主を代えているのです。

一時は古河公方とも協力体制を築き、関東管領方を凌駕するほどの戦いを見せた景春でしたが、関東管領方の太田道灌の活躍や、古河公方と関東管領の和睦などによって次第に戦況は悪化。一四七八年、ついに鉢形城を追われ秩父へ逃れることとなりました。

景春が秩父へ逃れた後、太田道灌の勧めもあり、

鉢形城には、すぐに関東管領

「上杉顕定」が入城します。

それから約七十年間、鉢形城は関東管領上杉氏の拠点として、東日本の政治の中心的役割を果たしたのです。

しかし、小田原北条氏が関東における勢力を拡大する中、一五四六年の「河越夜戦」で、時の関東管領上杉憲政が北条氏康（北条氏邦の父）に大敗、上野国平井城（群馬県藤岡市）に撤退しました。一五五二年、更に平井城を攻められた憲政は、ついに越後へ逃れ「長尾景虎（後の上杉謙信）」に救いの手を求めたのです。

一五六一年、長尾景虎は憲政から関東管領上杉氏の家督を正式に継承しています。ちょうどその頃、鉢形城には北条氏康の三男、氏邦が入城しました。

これ以降は、一五九〇年に豊臣秀吉方の五万人の兵に囲まれ、わずか三千五百人の城兵で二ヶ月にわたる籠城の末、城兵の身の安全を引き換えに開城するまでの約三十年間、北条氏邦がここ鉢形城の城主として活躍したのです。

## 関東管領とは

室町幕府は、足利尊氏が京都を本拠として開幕しました。しかし、鎌倉幕府が滅亡したとはいえ、関東には依然として強力な武家勢力が残り、中でも鎌倉は武家の聖地としての威厳を失ってはいませんでした。

そのため、尊氏は、鎌倉に東日本の統治機関として「鎌倉府」を設置し、子の足利基氏に任せることとしたのです。以後、この基氏の家系が「鎌倉公方」として、この座を世襲します。

鎌倉府が管轄した範囲が、関八州と甲斐・伊豆、後には出羽・陸奥も加わり、ほぼ東日本全体に及びましたので、鎌倉公方は、まさに東日本の将軍ともいえる存在でした（図「鎌倉府の統括範囲」参照）。

この鎌倉公方の補佐役を務めていたのが「関東管領」です。

関東管領は、幕府将軍から任命されました。

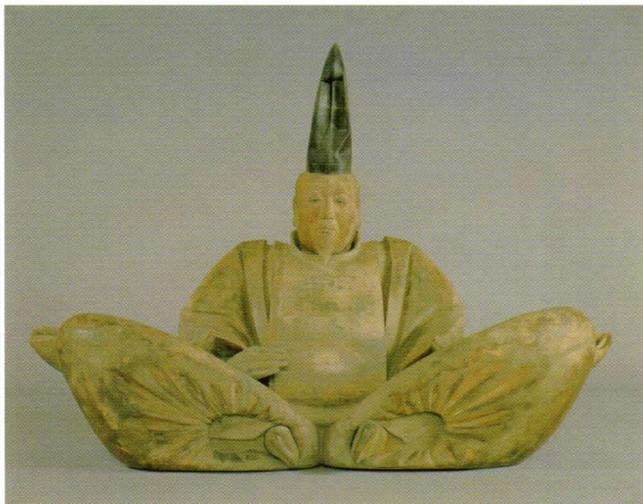
鎌倉公方の権限を代行する他、幕府将軍との調整の役割もはたし、東日本各国の守護に対して指示・命令を伝達する立場にありましたから、関東管領はさしずめ「東日本の副将軍」といふべき立場にあったといえます。

この関東管領職を代々歴任したのが上杉氏です。

## 関東管領上杉氏とは

上杉氏は、元々は京都の公家でした。初代の重房が、鎌倉時代に宗尊親王の幕府将軍就任にともなって鎌倉に下向し、やがて武士となったのです。

鎌倉幕府内で重職に就いていた足利氏と早くから外



**上杉重房坐像**（明月院蔵 国指定重要文化財）  
上杉氏の祖、重房の坐像。

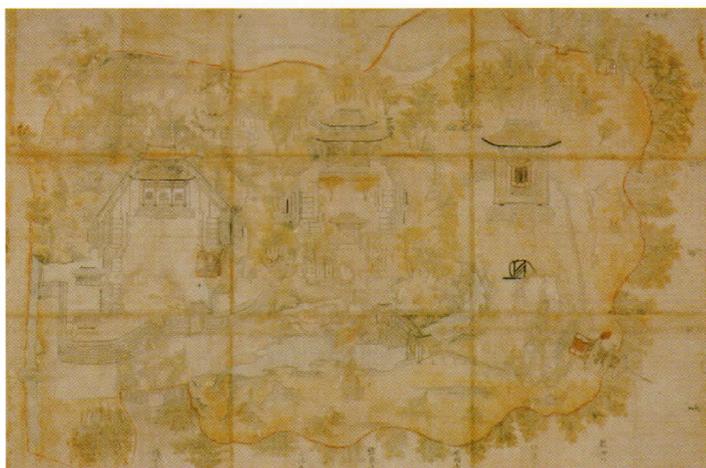
戚關係を持ち、重房の孫清子が、足利尊氏・直義を産んでからは、足利一門として確固たる地位を築きました。

このような背景のもと、足利尊氏の従兄になる第四代の憲頭以降、上杉氏は独占的に関東管領職に任命されています。

上杉各氏は鎌倉府の御所周辺に屋敷を構えたことから、その屋敷の地区ごとに山内上杉氏、扇谷上杉氏、犬懸上杉氏、宅間上杉氏と呼ばれています。また、憲頭の子憲栄は越後上杉氏、憲英は深谷上杉氏の祖となっています。（表「上杉氏略系図」参照）

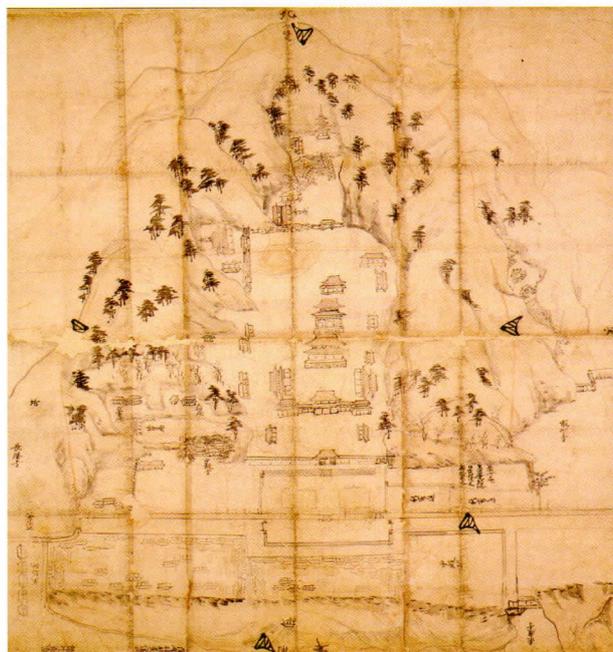
この中で、憲頭の直系となる山内上杉氏の影響力が最も強く、十五世紀前半からは関東管領職は山内上杉氏の世襲するところとなり、今でも、鎌倉市山ノ内地区（北鎌倉駅周辺）には「管領屋敷」という地名が残っています。

今回の企画展では、この憲頭以降の山内上杉氏を「関東管領上杉氏」として解説します。



**明月院古絵図**（鎌倉市明月院蔵 国指定重要文化財）

明月院は、鎌倉十刹の第一位禅興寺の塔頭。関東管領上杉憲方が中興の祖であり、関東管領上杉氏の外護を基盤として繁栄し、現在まで続く名利。室町時代、十刹は鎌倉公方が裁量権を持っていたため、寺域を示す朱線が周囲にめぐらされた中に、第二代足利氏満の花押が描かれている。鎌倉市山ノ内地区の建長寺と円覚寺の間の名月谷に位置する。関東管領の屋敷の位置は明確になっていないものの、今も名月谷の入口一带に「東管領屋敷」「西管領屋敷」という地名が残る。



**紙本淡彩 円覚寺境内絵図**（鎌倉市円覚寺蔵 国指定重要文化財）

鎌倉府の管轄範囲内でも鎌倉五山などいくつかの重要な寺社は幕府将軍が直接統括することとされていた。1333~1335年頃に描かれたこの絵図には、五山第二位の円覚寺の寺域を定める朱線が四周にめぐらされ、線上の五か所に上杉重能の花押があることから、上杉氏が早い時期から幕府将軍の職務を代行したことがうかがわれる。重能は上杉氏第二代頼重の娘の子で三代憲房の養子。



図中に見られる上杉重能の花押



**明月院**（写真提供：明月院）  
紫陽花寺としても名高い現在の明月院。

## 関東管領 上杉顕定

上杉顕定は、一四五四年越後守護の上杉房定ふさあきの二男として越後に生まれました。

一四六六年に関東管領上杉房頭ふさあきが陣中で急死した後、嫡男がいなかった房頭の家督を継ぎ、若くして関東管領に就任しました。

実父の房定は、当初この縁組に同意しかねていたようですが、京都の管領畠山氏などの諸武将の要請や、最終的には足利將軍の命を受け同意に至ったようです。

ここから、一五一〇年に亡くなるまでの四十四年間、顕定は関東管領職に在位します。四十四年間というのは、歴代の関東管領と比較しても圧倒的に長い年数です。しかも、顕定の在位期間中は決して平穩無事に過ぎたわけではありません。

就任時点で既に鎌倉公方の幕府への反乱（享徳の乱）が長期化しており、やがて自らの重臣長尾景春の乱、更には同族の扇谷上杉氏との抗争（長享の乱）などの数多の争いが繰り返されました。また、一四九八年には鎌倉の大仏殿を押し流した津波の原因といわれる明応地震という未曾有の天災にも見舞われています。

一般にはあまり馴染みの少ない武将ですが、上杉顕定とは、これらの争いや大災害を凌ぎ、四十四年間の長期にわたり関東管領の座に君臨し続けたのです。

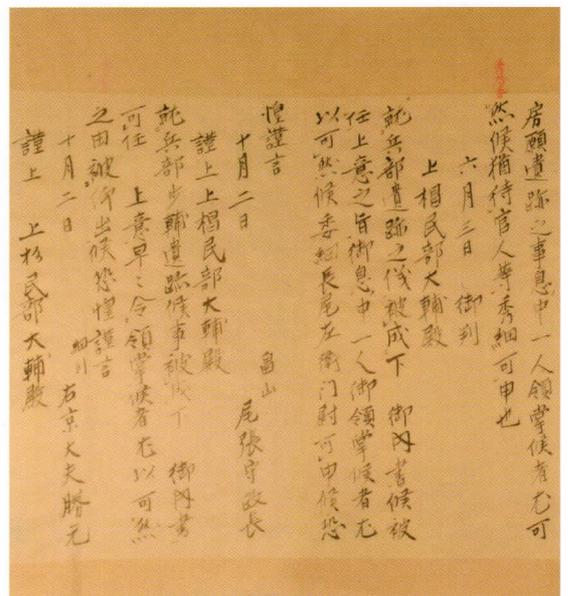
関東管領職と併せて、武蔵国・上野国・伊豆国の守護も兼務し、名実ともに東日本の副將軍だったといえる上杉顕定でしたが、最後は生まれ故郷の越後の地で無念の死を遂げています。

一五〇九年、顕定の実弟である越後守護上杉房能ふさよしが、長尾為景ながお（上杉謙信の実父）を主力とする同族の上杉定実さだまことに攻められ、自刃に至るといふ事件が起こり



伝上杉顕定所用 鞍・鎧（新潟県南魚沼市 雲洞庵蔵）

顕定の三代前の関東管領憲実（養父の父）が開基となる雲洞庵は、顕定が亡くなった長森原からほど近い場所にある。雲洞庵の宝物館には顕定が最後に着装したと伝わる鞍・鎧が保管されている。鞍の前後とも、中心部だけを削り出した巻貝を雲に見立てて全面に散らし、中央に上杉氏の家紋、その両側に雲間を飛ぶ鳳凰が金箔で描かれている。鞍前部の右側だけが直線的に欠損している。



報恩寺年譜（埼玉県立文書館蔵）

この記録からは、前関東管領上杉房頭の急死後、將軍足利義政、管領畠山政長、同じく管領細川勝元が、越後守護上杉房定に対し、子息の一人に関東管領上杉家を継ぐよう再三説得したことがうかがえる。

ました。顕定はその仇を討つという大義のもと越後に乗り込みます。

主謀した長尾為景と上杉定実を一旦は越中に駆逐し、越後の国の大半を平定した顕定は、越後に残留し、越後国内の統治を進めようとした。

しかし、なかなか越後全域の掌握に至らない中、長尾為景が上杉定実を奉じて越後に復帰したのです。最初は攻勢に出ていた顕定でしたが、次第に為景方に加担する武将が増え、戦況は悪化しました。

一五一〇年六月二十日、敗走途中の長森原（現新潟県南魚沼市）で為景方の援軍、高梨政盛の攻撃を受け、ついにその生涯を閉じることになったのです（長森原の戦い）。

長森原の戦いでは多くの人々が亡くなりました。合



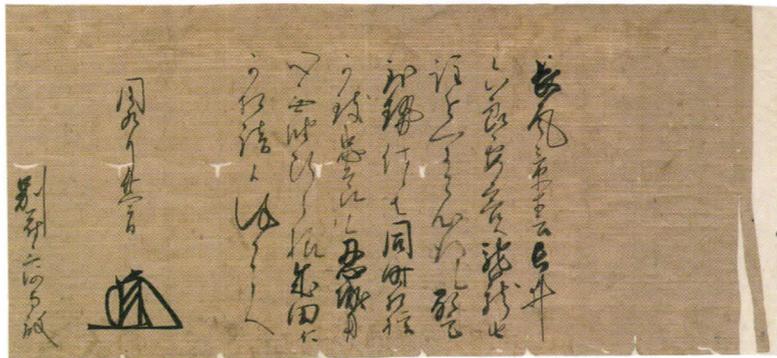
伝上杉顕定所用 碁盤 (藤岡市仙蔵寺保管  
藤岡市指定重要文化財)

盤面寸法が唐尺であることや、裏面の削り跡などから1400年代か1500年代につくられた碁盤と考えられており、クチナシ形の脚をもつものとしては伝世品の中でも最も古く貴重なもの。裏面には上杉氏の家紋「竹に雀」が彫られ、顕定の愛用品と伝承されている。



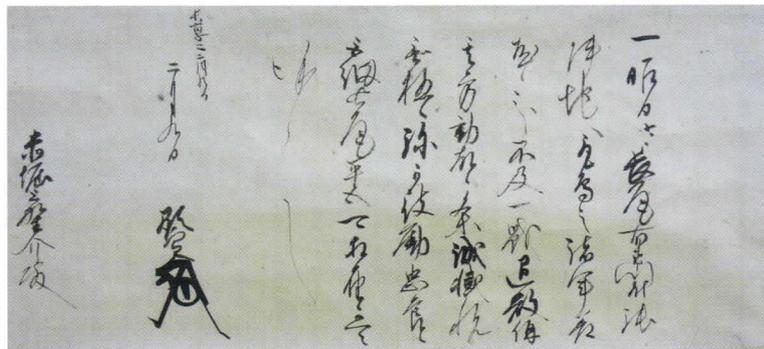
文殊獅子手持経巻図 (藤岡市仙蔵寺蔵  
京都国立博物館保管)

室町幕府將軍家専属の絵師で、狩野派の始祖として名高い狩野正信による文殊菩薩像。平井城跡近くの仙蔵寺に顕定の遺品として伝わるこの絵は、描かれた時期などから顕定が幕府將軍より拝領したものと考えられる。



定利成氏書状 (個人蔵)

顕定が生まれた年に起こり、関東管領就任時点で既に長期化していた古河公方足利成氏との抗争(享徳の乱)は、1478年に和睦によって収束に向かう。和睦の翌年、成氏は、顕定に協力して忍城を防備するよう別府宗幸に命じている。



上杉顕定感状 (埼玉県立文書館蔵 埼玉県指定重要文化財)

鉢形城入城から十年後の1488年、同族の扇谷上杉氏との抗争(長享の乱)において、顕定が赤堀上野介の戦功を賞して発給した感状。この文書では、鉢形城から秩父へ逃れた長尾景春が、扇谷上杉氏方として陣を張り顕定に対抗していたことがうかがえる。



伝上杉顕定所用 四十二間総覆輪筋兜 (個人蔵)

中央部がやや低く前後が豊かに膨らむ見事な阿古陀形の兜。黒漆塗りの鉢で四十二間の筋全てに施された覆輪、前後の篠だれ、眉庇の外縁、奈良菊の鉞に至るまで、金箔押しされている。時代様式などと併せ、顕定の所用と伝えられている。

戦場跡にはかつて戦没者を埋葬した数多くの塚が存在していたそうです。中でも最も巨大な塚が「管領塚」と呼ばれ、古くから関東管領上杉顕定の墓として伝わっています。

地域の方々は今でもこの管領塚で毎年祭事を行い、長森原の戦いで亡くなった顕定をはじめとする多くの武者たちを供養しています。現在は「管領塚公園」として整備され、平成二十年には南魚沼市を挙げて「関東管領上杉顕定公戦没五〇〇年祭」も行われました。

## 関東管領上杉氏と鉢形城

上杉顕定は一四七八年から亡くなるまでの三十二年間、鉢形城を拠点としていました。顕定が亡くなった後も、憲政までの約七十年間は、関東管領上杉氏の持ち城だったと考えられます。

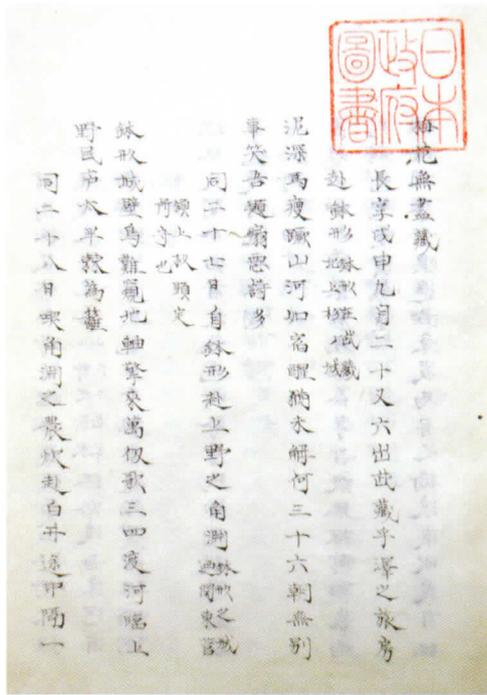
しかし、顕定が亡くなった後、関東管領上杉氏では家督をめぐる抗争が繰り返されました。顕定の後は養子の顕実（古河公方足利成氏の実子）が関東管領を継ぎますが、同じ養子の憲房（顕定の養父房顕の甥）に鉢形城を攻められ、その座を奪われています。

憲房の後、憲寛（古河公方足利高基の実子）が関東管領を継いだ後に憲房の実子の憲政が内乱を起し、その座を奪っています。

こうした内部抗争の繰り返しにより、統率力が急激に弱体化していった関東管領上杉氏は、一五四六年の河越夜戦において北条氏康に大敗を喫し、同族の扇谷上杉氏が断絶に至るほどの痛手を負いました。この敗戦で上野国平井城に撤退したことで、鉢形城は関東管領の拠点としての機能を失うことになったと考えられます。

北条氏康は、その後も関東における勢力を拡大し続けました。一五五二年、平井城まで攻め落とされた憲政は、最早関東に頼る者なく、ついに越後国に逃れ、越後守護代の長尾景虎に応援を求めることになったのです。

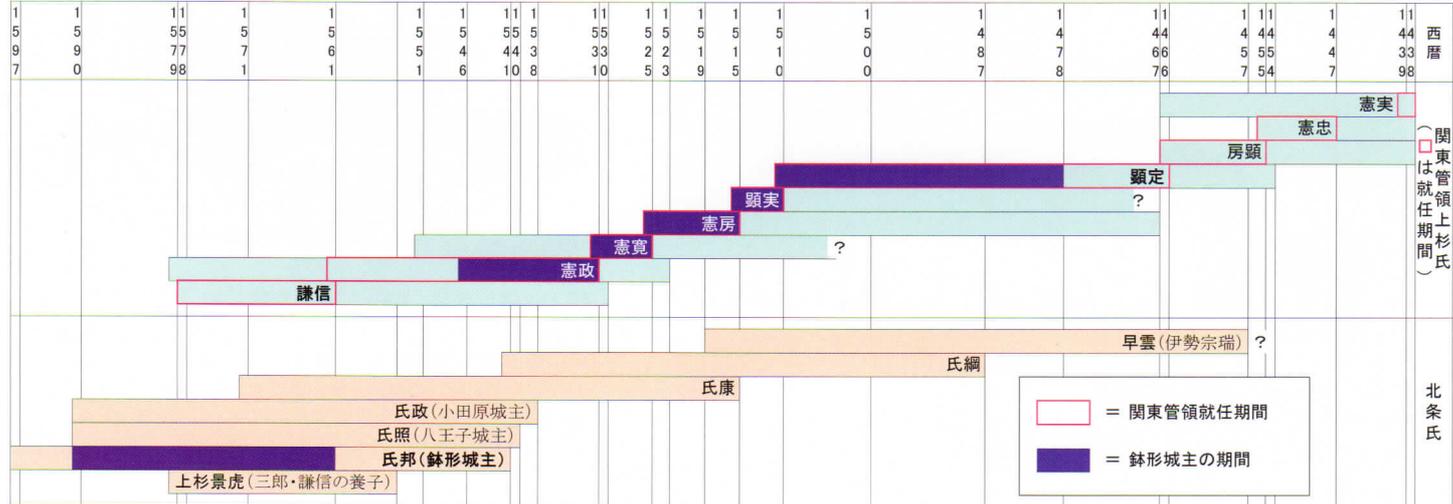
この頃、鉢形城周辺では、北条氏康の子氏照が滝山（現東京都八王子市）の大石氏に、同じく氏邦が、藤田氏の養嗣子となります。大石氏・藤田氏は、ともに古くから武蔵国内の有力な国衆で関東管領上杉氏の宿老・家老という重臣でした。この縁組は、北条氏が関東管領上杉氏に代わって武蔵における領国経営の地盤



梅花無尽蔵（続群書類従 独立行政法人国立公文書館蔵）

太田道灌の招きで江戸城に滞在していた、当時の人気連歌師「万里集九」は、道灌が主家の扇谷上杉定正に殺害された翌年の1488年、江戸城を出て京へ帰った。道中、上杉顕定方として菅谷の陣（現嵐山町）で定正方に対峙している道灌の遺子資康のもとに滞在した後、顕定がいる鉢形城を訪ね一泊している。鉢形城から上野国へ向かう際、「鳥も窺い難し」として有名なこの詩がつくられた。この詩の前には「鉢形の城すなわち関東管領上杉顕定守る所也」と記されている。顕定が入城してから十年、鉢形城は関東管領の居城として要害堅固な城となっていたことがわかる。

関東管領上杉氏・北条氏 略年表



を固める礎となったのです。

越後の長尾景虎は関東奪還という大義のもとに憲政を奉じて関東侵攻を繰り返しました。北条氏の小田原本城をも脅かした一五六一年、景虎は憲政から正式に関東管領上杉氏の家督を継承しました。こうして鉢形城を離れた後も、関東管領上杉氏は長尾景虎によってその命脈が保たれたのです。家督を継いだ景虎は、関東管領上杉政虎を称し、後に室町幕府將軍足利義輝より一字を授かり輝虎と名を改めました。更に出家後に法号「謙信」を名乗っています。「越後の虎」として名高い戦国武将「上杉謙信」です。彼こそ顕定から数えて五代後の関東管領上杉氏であり、謙信は顕定の直系の曾孫（養子の子の養子）にあたります。

しかし、謙信が急死した後は継承者がなく、謙信が最後の関東管領上杉氏となってしまったのです。

※景勝が謙信の家督を継ぎましたが、彼は謙信を祖とする上杉氏と称しました。「御館の乱」で前管領憲政を殺害した景勝には関東管領上杉氏は継承されていないのです。

一方鉢形城では、謙信が関東管領上杉氏の家督を継承したちようどその頃、北条氏邦が入城します。藤田氏の家督を継承した氏邦が入城した以降、鉢形城は北条氏の北武蔵の要衝として大きな変貌をとげることになったのです。

※鉢形城は、河越夜戦で上杉憲政が平井城に撤退し、北条氏邦が入城するまでの十数年間、誰が鉢形城主または城代を務めたということが明確にわかっていません。しかし、北関東における関東管領上杉氏と北条氏の覇権争いの推移を鑑みると、上杉憲政が越後に逃がれるまでの間の鉢形城は、関東管領上杉氏の重臣としての藤田氏が城代的な役割を果たし、北条氏邦を養嗣子として迎えてから氏邦が入城するまでの間は、北条氏の重臣として立ち位置が変わった藤田氏が城代的な役割を果たしていたのではないかと推察できます。

鉢形城では、平成九年から十三年までに二の曲輪・

三の曲輪の発掘調査を行っています。調査の結果、二の曲輪からも三の曲輪からも一四〇〇年代後半から一五〇〇年代前半までの遺物が出土しました。調査以前は、本曲輪以外の大部分が北条氏の時代に拡張されたものと考えられていましたが、この調査によって、関東管領上杉氏の時代、少なくとも三の曲輪までは拡張されていたことが確認されています。

#### 伝 上杉顕定所用小刀（個人蔵）

長森原古合戦場（現新潟県南魚沼市）の「管領塚」は古くから関東管領上杉顕定の墓と伝わっている。大正五年に管領塚から出土したこの小刀は、顕定が最後に身に付けていた「鎧通し」と考えられている。



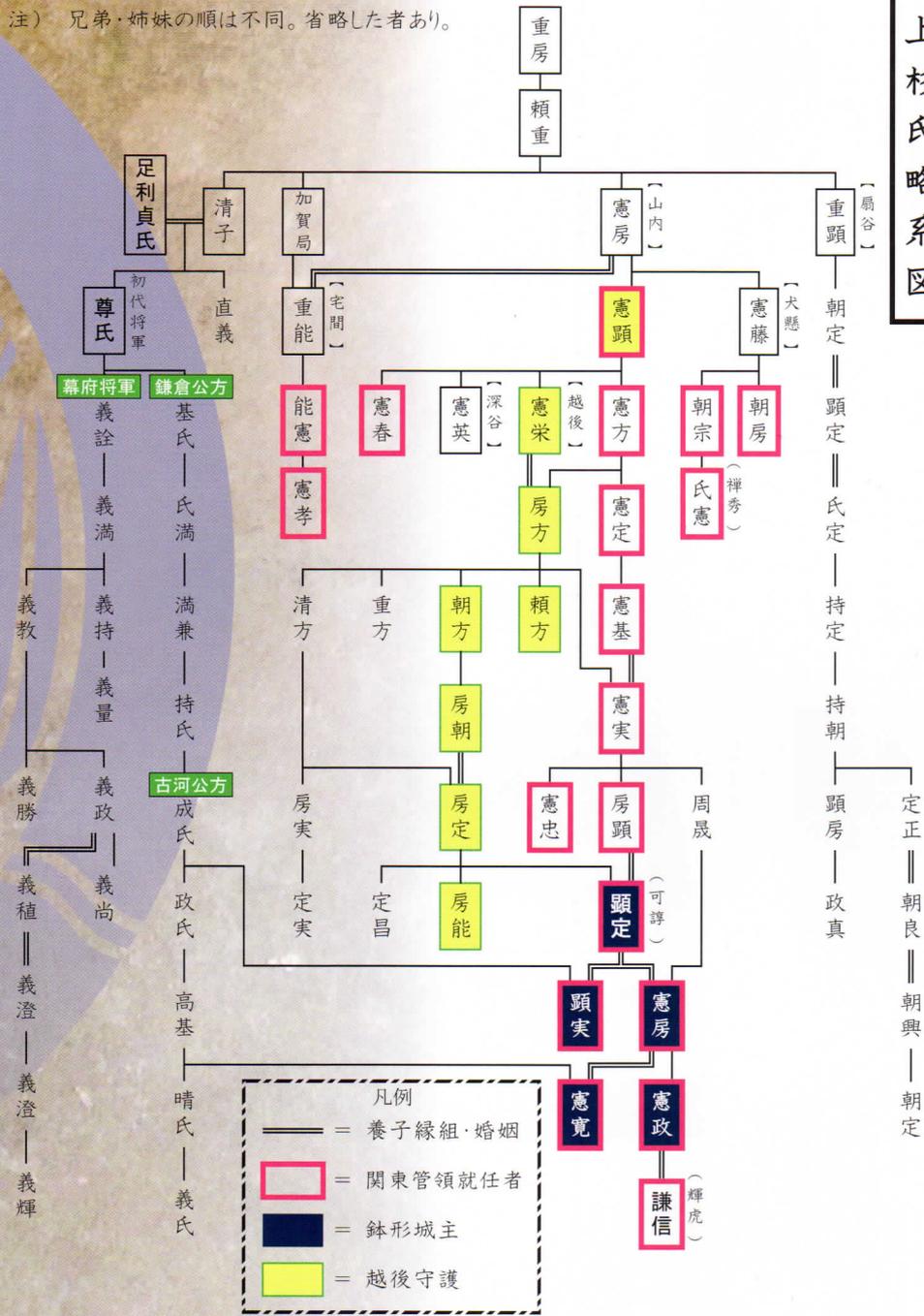
管領塚公園（写真提供：新潟県南魚沼市教育委員会）  
管領塚は現在「管領塚公園」として整備されている。



素焼きの香炉（鉢形城三の曲輪出土）  
三の曲輪から出土した関東管領上杉氏時代の香炉（1400年代後半）。

注) 兄弟・姉妹の順は不同。省略した者あり。

上杉氏略系図



鉢形城歴史館 平成25年春季企画展 プレ北条氏邦シリーズ第1回

『鉢形城主 上杉顕定』～東日本の副将軍 関東管領上杉氏と鉢形城～

【参考文献】

- 「神奈川県史」「新潟県史」「新編埼玉県史」「鎌倉市史」「鎌倉国宝館図録」「藤岡市史」「藤岡の文化財探訪」
- 「小川町の歴史」「寄居町史」(以上、詳細省略)
- 浄光明寺敷地絵図の研究 大三輪龍彦 2005 新人物往来社
- 「北条氏邦と武蔵藤田氏 論集 戦国大名と国衆②」黒田基樹・浅倉直美 岩田書院 2010
- 「史料紹介・上杉顕定文書集 駿河台大学 論叢 第40号」黒田基樹 2010
- 「史料紹介・上杉憲房・憲寛文書集 駿河台大学論叢 第41号」黒田基樹 2010
- 「史料紹介・上杉憲政文書集 山内上杉氏文書集3 駿河台大学論叢 第41号」黒田基樹 2011
- 「平井城跡探訪 築城550年記念」矢島 勇 1988
- 「平井城興亡記 山内上杉100余年の光と影」蓮舎勇夫 (株)上毛新聞社出版局 1996
- 「町立管領塚史跡公園完成記念誌 長森原古合戦場 上杉顕定公」管領塚整備実行委員会 1989

【協力機関・協力者】(五十音順 敬称省略)

- 雲洞庵・円覚寺・円満寺・鎌倉市教育委員会・鎌倉国宝館・甘楽町教育委員会・国立公文書館・埼玉県立文書館
- 上越市公文書センター・仙蔵寺・藤岡市教育委員会・本間美術館・南魚沼市教育委員会・明月院・米沢市上杉博物館
- 新井浩文・南雲良一・別符 聡